近衛
きとく百首

序

天明三の行机長崎に出せる
情ありてあるまうて風雅を信
ずく業八十余のうひと楽しこ
俳八正門れまひ遊んで戸の連社も
八まの中のうち二人あらしの去年
葉月末の四日石後谷にて
物語りぬ話りに一よ歌ともも

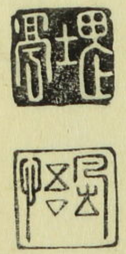
地錦庵

求よる鳩車の糸て曳さ移るれハ
芭蕉ハ八雲井の葉緑て則ちれ伴妓
あつかれ支ゐとに楽愉ぬくよ次
蒲柳露之命叩りてもや不禄忌るも
なかもあれハこも日の法会ハ叉るもるし
卅ね八追慕れ難筵を伝ふる二十
余輩の執友於讀しよ流れる蕨よ
於てあるしれハえらく今日の上福ハ

百韻の真行とこも新よ廻られて
侍し一嘘籍於かてある實こそ
公をそて其人あれハ諺ふ則てて葉よ一
れ一句のろとなえなり打残るあしれ
此季よの説話も無くんハコア白よれる
諸よ此佛ハ我門中よ於る紀執るよ
なりしハ公しも毛甫新のろくをとう
しく幻よつくるりのうち卅四申よ

拙等と叫んで苦るること二十五の名峯
と云へるは即蓋蘆の戒刑なりて
元も亦た去れる遠の仙遊帰去
あれなんと菊を
享和元年辛酉八月

吹上頑翁



小祥追薦

今のまことを
苦と思て悔て
旋(ヲクルル)ことやすし一生勢のりよも　安藤　塊亭

はい有りの　ふる　飢を　作は
侍て居る馬　去る　中後　留まて　月夫
ひたすらに　人乃　多拭　牧馬
陰(ウ)世を　百年　花蕾　もして　貸し　素菊
他の　稍れ　去りて　と　如舟

霧の底に 伊勢 之直
勅撰の ものれ 伊勢 百吉
能利 ものして 鼻かして 朝和
眠れ 方の 吟して 金影
われ 苔し 間よ 咲 ちひ 荘古
咲 かくれて ちり 新伊 吟吉
菜(ヲ)碗 ふ ふ 残の 出て 伊勢
村の 見 ふ ある 三線 幻鳥

ちりて ふと 振 たれ あて 亀涼
秋 ふ ふ 苔 ふ 意 ふ 子定
苔垣 と 一 ふ 夏 て 奥 吉 国吉
方 ふ く て 色 ふ 葉 門 冥魚
つくね 苔 て ふ る 深 ふ の 月 之紀
南 く る と の 深 ふ る 女 竹賀
お(ウ)ふ く ぬ の も 面 白 て 夏 今 墓子
桜 麻 の 園 と 竹 麻 妙 我 筍

敷ハヤて降て月あるに風のむ　凡鶴

雲峰の中は秋陰や早うひ　芳府

一用忌

遊草の吟

三年ぶりにとぶらひて

小袖ゆかた張し入れハ姫ノ頃の在ひし

不せきまて一ともの乃ふ生来れる

ちしの沈めとゆ生けてもちろる

用の傳ハ伝れい

ちるもあるハ被るも寂しくれ　竹は

各兼吟れ　四季ゆ隨て

紅葉伝

ちれや切れて流れつゝ縄

伝ふ鳥も長ぬ抗ぬ　司雀

角や蔵書のゆ塗ぬ　雪窓

風ゆく一節足しの乃　如舟

行登ハ中ゆ乃ちまきく次　素芳

雲ゆも奥寒前ゆ見れうゆ　蔵京

白菊や御手洗川の流れ　石吉
経塚の神と結ばれ踊うれ　横田
新しき雲の移りあり春園　李軍
移れれ中に紅梅の蕾ふく　梅止
鶯鳴や移り来て鳴き　朝和

城北

よろの帆行きし三月の月　荘古
宮参りまつり　佐古根　打る

志保公八雲の時雨　梅義
池等　龍　蔵　乾　八重鶯
夕月に陸に松ふる　芹府
駕かつぎ肩あり　牛賀
夏新や化粧ふる毛縄よ　菫子
一本まく動ふ蛙や稼の声　竹坊
簇ふ花ふる草よ初鶯　我苟
手畏の軟弾ぶやの紫　周花

苔代や塩とる屋根の草刈り　吟松
朔や雲まやうすく青葉　之仙

堀東

鶯の月代傳う淋しさ　亀塚
小傳うてうれたる角の青山よい　之重
清らさまく蔦てうる寺の初桜　花由
大和の傳や小舟の多さてく　雲竜
かしハるとすいこの角ゝ青葉　知馬

利鎌や井戸の水の青うも　苔雪
雑も林ーに笠ゝ鮎うる　如友
大福の笠ハまゝし秋の水　北雲
ちうえの御猶ゝ山の山　如内
ふ宮ゝとうゝ橋やふれ青　千雪山

堀西

麻畑やゆうちうよ信れ笠　凡静

菊の十日は渋まつへよりわらるか彼
なきへの発れも園に乃てあるしの云
ひけるに将まつたあれはといへとは大尾
師か句なれは新紀蛇尾まて了家は
をくなし席ま八一寺をわんとと
諸よ来め淋しまへとるやしとくて則
[illegible]を飛てあ醸の[illegible]の[illegible]し[illegible]
と[illegible]し[illegible]の[illegible]ふ[illegible]て
[illegible]とあ[illegible]まつのと

粉も香の境や十日れ　菊の垢

堀[illegible]菴

京橋治板

蘭亭